

「バブルについて」

千葉の県人 鎌田 留吉

証券業界に長く身を置いてきたものが、株式投資の初心者には、先ず伝えなければならぬことは、「バブル」について語ることであると思う。あたかも大学時代に学んだ「人はよく、今日は風邪気味だとか、体調が悪いとか言うことがある。同様に、人間の心もよく風邪を引くのだ。」との斎藤茂太氏の叢智が私のその後の人生に大いに有益であったように、金融の世界にはよく「バブル」というものが起こり、その頻度は現代の世界状況で益々多くなっていることを伝えておくことは、株式投資の初心者の投資人生に必ずや有益なものを付与すると信じている。

株式市場が、実態経済から大きく乖離する現象をバブルと呼ぶ。それは集団的・熱狂的・狂信的営みである。この30年の間に本当に多くのバブルが膨張しては、破裂して消えていった。バブルの渦中になると人々は安易に儲かる為、自分はもしかすると相場の天才ではなかろうかなどと考えだし、組織的に「握り」（利回り保証）などをしたくなってくる。バブルの何がいけないかというと、バブルは必ず大きく弾け、その後に大量の含み損を抱えた人々の死屍が累々と積み重なり、「その屍はあなた！！」だからだ。不良資産の山が築かれ、破産者が出来し、企業の行動もその処理だけに向けられるため、前向きな投資も消費も抑制され大幅な景気停滞・不況が訪れるからである。

特に株式市場にはバブルが発生し易い。何故なら株式市場は人間の精神の作用そのものであり、現実世界ではないからである。例えばマツダという株式を買おうと考えることは、マツダが持っている様々な要素の中からひとつの要素を抽出し、マツダとはこのような特徴を持った会社だと認識し、今の円安という状況とすり合わせ有利な立ち居地にいると評価し、買いだと判断する、そのような精神的営みそれ自体だからである。

従って株式市場は、精神がもつ特徴を自ずから備えている。

- ① 主観的であり、客観的ではない；その銘柄が備えている数多い要素をどのように理解し、評価するかは人様々である。
- ② 理解したがる；抽象化＝捨象したがる。複雑な現実社会の事象のなかから僅かな特質のみを捕まえ、「今年のテーマは円安相場」と名付けて安心したがるのである。
- ③ 物理的・時間的制約がない；シェールガス革命で起こりうる向こう3年間ほどの企業・社会の変化を数ヶ月で株価に織り込んでしまう。また現在世界的に行われている、超超金融緩和によって所謂「資産(株式・不動産を中心にした)バブル」が起こるのもこれらは物理的在庫にならないからである。
- ④ 感情的である；欲と臆病との間を揺れる。安くなると弱気になり、高くなると買いたくなる。

バブルに対する正しい対応は、「飛び降り、振り返らないことだ。」高値から15%下げた時に「成り行き」で飛び降りられる自信がある人なら付き合いでもよい。バブルの渦中で人は、孤独に、理性的に、懐疑的に思考しようと努めなければならない。3月11日記